

お茶うけ 第93話

ノリタケの物語 (2) 純白硬質陶磁器

現在では高級陶磁器メーカーとして世界的に知られる(株)ノリタケカンパニーリミテドにも、純白硬質陶磁器の製造に成功するまでには、創業期の「森村組」時代の並々ならぬ苦労がありました。

明治16年(1883年)東京の「森村組」に、ニューヨーク支店の「森村ブラザーズ」の森村豊から、一通の手紙とフランス製のコーヒー茶碗の見本が届きました。手紙には、「アメリカの人びとが毎日使うコーヒー茶碗を作ってほしい、そのほうが日本の徳利や茶碗よりも売上が多く見込める」と書いてありました。大倉孫兵衛は早速その見本を持って、瀬戸の窯元を始め全国各地の有名な窯元を回って製作を依頼しましたが、どの窯元からも「とてもできません」と断られました。孫兵衛がその旨をニューヨークに知らせると、豊から「人の作れるものが、作れないことはない。作れないでは承知しない」と厳しい抗議の手紙が返ってきました。

そこで孫兵衛は、瀬戸の陶工に、見本に近いものを作るための生地と焼き方を研究させ、ようやく、把手のついた厚なコーヒー茶碗を作りました。肌はねずみ色でしたが、その茶碗に九谷焼風の絵付けをしてニューヨークに送ったところ思いがけず良く売れ、さらにコーヒー用の砂糖入れとミルク入れ・水差しを加えた6人用のコーヒーセットの注文が追いかけるように届きました。(生地とは、焼成する前の成形して釉薬(ゆうやく)をかけてない陶磁器のことで、素地とも言う)

明治22年ごろになると森村組の輸出が増え、輸出商品も和風のものから洋風のものへと移っていました。その年、森村市左衛門は豊とともにパリ万博を見学し、先進国の優れた陶磁器作りの技術に改めて驚嘆しました。

次いで、明治26年、大倉孫兵衛はシカゴ・コロニア記念万博を訪れ、展示品のヨーロッパ諸国の陶磁器を見て、日本の商品が生地、絵付け、彩色のすべての面で格段に立ち遅れていることを痛感し、商品を改善することを決意しました。

孫兵衛は、先ず絵付け職人たちに洋風の絵を描く技術を習得させようと考えて、アメリカで絵筆と絵具を買って帰り、職人たちに西洋風の絵を描くように命じました。最初は戸惑っていた職人たちも、すぐに西洋の筆と絵具になって、陶磁器にドレスデン風の「草花散らしの模様」などが描けるようになりました。西洋風の絵付けをしたこのコーヒー茶碗は、生地はねずみ色でしたが、意外に好評でよく売れました。

翌27年にはニューヨークの村井保固(やすかた)から、「二つのデパートから、純白のテーブルウェア(食卓用食器)の引合いがある」との知らせが、商品見本とともに届きました。それによると、デパート側の条件は「純白の皿であること。食器皿の絵柄は縁模様くらいなので、皿の大部分に生地面が出る。生地が灰色では不潔に見えるので、絶対に純白でなければならない」というものでした。

孫兵衛は正念場を迎えました。それまで生地屋に頼っていたのを止め、いよいよ自力で純白硬質陶磁器(以下、純白磁器と略します)の生地を作ろうと決心しました。しかし、当時の日本では、純白磁器の生地に使える原料(原石や原土)がどこにあるのかも知りません。孫兵衛は、自ら全国を歩き回って純白磁器の生地に適した原料を探しました。原料のサンプルを採集しては、使いものになるかどうかの実験を繰り返しました。何年にもおよぶ血の滲むような努力ののち、ようやく天草陶石という優れた原料を探し当てました。

明治36年孫兵衛はその天草陶石ほかいくつかの原料を持ってヨーロッパに渡り、ベルリンの粘土化学研究所を訪れて、これらの原料を調べて純白磁器用の生地が作れるものかどうか、焼成試験を含めて依頼しました。試験結果は極めて良好でした。独力で研究を始めてから約10年の歳月が過ぎていました。

純白硬質磁器製造の目処が立ちましたので、森村組の森村市左衛門、大倉孫兵衛、村井保固らは、明治37年(1904年)「日本陶器合名会社(後の日本陶器(株)、現在の(株)ノリタケカンパニーリミテド)」を設立し、現在の名古屋市西区則武新町に本社および工場を置きました。これで純白硬質陶磁器の洋食器などを大量に生産して輸出する体制が整いました。

同社では、さらに10年間の研究を重ねて、大正3年(1914年)に本格的なディナーセット用の直径8寸の大皿を純白硬質陶磁器で作る技術を確立し、世界のトップレベルのメーカーの仲間入りを果たしました。

現在その敷地の一部に、クラフトセンターやギャラリーなどの建物と木立を配置した「ノリタケの森」が作られ、「ノリタケのものづくり」の技術、伝統、芸術の粋が紹介されています。

クラフトセンターの1階と2階では、陶磁器の生地造りから、絵付け、焼成までの一連の作業が実際に行われていて、見学者は通路を通りながら実際の作業と各段階の作品を身近に観ることができます。

私は今年の1月、スケジュールの合間の時間に「ノリタケの森」を訪れ、クラフトセンターを駆け足で見学しました。大変興味を覚えたので、創業期の市左衛門や孫兵衛などの活躍と苦労の物語を読み、予備知識を仕入れて、再度4月に訪れました。二回目は、目が肥えたこともあり、陶磁器の原料、生地成形、絵付け、焼成、仕上げなど、今では当たり前のように行われている作業の一つ一つに、先人たちの知恵と工夫と弛まない努力がこめられていることを感じることができました。

以上

参考文献:

『森村市左衛門の無欲の生涯』砂川幸雄著 (株)草思社刊 1998年4月1日 初刷
『製陶王国をきずいた父と子 大倉孫兵衛と大倉和親』砂川幸雄著 (株)晶文社刊 2000年7月30日 初版

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。